

甲子園の魔物の存在について

1200465 田中 克幸
高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

高校野球をテレビで観戦していると、実況の方が「甲子園の魔物」という言葉を用いることがある。この言葉はどのような場面で使用され、どのような意味があるのかを調査した。また本当に「甲子園の魔物」が存在するのか、どのような条件によって引き起こされるのかということについても研究した。さらに現在、高校野球選手権大会の過密日程や球数制限が問題視されている。政府や各都道府県で議論されているが、根本的な解決には至っていない。この問題と「甲子園の魔物」の存在は関連性がある。現在の高校野球の諸問題と関連付けて研究した。また「甲子園の魔物」とは対照的に「野球の神様」という言葉も存在する。この言葉が使われ始めたきっかけや意味についても研究した。

2. 序論

卒業論文をこのテーマにした理由はスポーツ観戦をすることが趣味であり、特にその中でも高校野球を観戦することが好きなのでこのテーマに設定した。高校野球の歴史は長く、第一回大会は1915年に中等学校優勝野球大会として開催された。参加校数は73校でそのうちの10校が出場した。この長い歴史がある高校野球ではさまざまな名試合がたくさん繰り広げられた。そのような試合で使われる言葉がある。それが「甲子園の魔物」である。この言葉が使われ始めたのは1975年に遡る。秋田商業と洲本（兵庫）の試合がきっかけである。地区大会で甲子園での戦いを経験している洲本がミスを連発して5失点したのに対して、不慣れなはずの秋田商業が慎重にプレーをして勝利を収めた。この試合により、理屈では考えられない力が働いたというイメージがついたのだろう。では、どのようにしてミスが連発し、どのようにして劇的な試合になるのかをさまざまな観点から調べてみた。まずは外的要因である。高校野球選手権大会は夏に行われる。夏の甲子園は高温多湿で、雨の降らない日が多い。また最近では過密日程や球数制限などの課題が生じている。厳しい環境の下で試合を行うため、体調に支障をきたす生徒も毎年出てきている。その対策として攻守の交代時だけでなく適当なタイミングでの水分補給の時間を設けた。観客に対しては大型扇風機を設置し、うちわを配布するなどの対策をとっている。しかし、完全に暑さを和らげることは至っていないので、まだまだ改善の余地がある。一方、内的影響も存在する。主に緊張・責任・焦りである。甲子園という大舞台で野球ができるのは日本中のごくわずかの人数に限られ、都道府県の代表であり、

みんなの思いも背負っているため、とてつもない緊張や責任を感じるだろう。また焦りとは投手がピンチを迎えた場面や打者が得点のチャンスを迎えた場面を感じる。投手は「ここを抑えないと試合の流れが相手チームに傾く」と感じ、打者は「ここで決めないと試合の流れが変わってしまう」と感じる。したがって試合の流れが左右する場面で焦りを感じると言える。しかし、甲子園には魔物だけが存在するわけではない。「野球の神様」という言葉がある。この言葉を説明するためには1994年の第76大会の決勝戦である佐賀商業（佐賀）対樟南（鹿児島）の試合がぴったりだと思う。大方の予想は圧倒的に樟南優位であった。なぜなら鹿児島勢はその前年までの10年間で5度もベスト8入りしていたからである。対照的に佐賀は弱小県であり、一県一校の出場が定着する第60回大会より以前は甲子園出場することがとても厳しかった。佐賀県の場所がわかっていない人もいたので驚きである。しかし実際に第76回大会で優勝したのは佐賀商業であり、9回表の満塁ホームランで試合が決着した。まさに劇的な試合である。この試合の結果は両県の野球史を大きく分岐させ、佐賀商業の優勝は奇跡の優勝と呼ばれた。実際に戦った樟南の選手の多くは、今でも「10回試合したら9回勝てた相手」と言い、佐賀商業の選手は「もう一回やったら勝てなかった。神がかっていた。」と言っていた。では、なぜ「野球の神様」は佐賀商業を選んだのだろうか。それは佐賀商業の選手たちは勝ち進むにつれて、相手がどこであっても同じ高校生だと感じるようになり、緊張がほぐれていったからである。したがって選手たちは前評判などを気にせず、試合を積み重ねていくうちに成長していき、決勝で優勝候補の樟南を主将の劇的な満塁ホームランで下し、優勝したのである。

3. 目的

今回の研究の目的は甲子園には本当に魔物が存在するのか、また存在するならば、どのような条件において現れるのかを研究した。また現在の高校野球の諸問題（過密日程・球数制限）と関連付けて「甲子園の魔物」について研究した。一方で緊張・責任・焦りなどといった内的影響と関連があるのかも調べた。さらに「野球の神様」という言葉が使われるようになったきっかけを研究し、「甲子園の魔物」と比較した。

4. 方法

今回の研究では劇的な試合の定義を「逆転した試合とサヨナラ勝利した試合」とした。またそのような試合が起こるきっかけを外的要因（応援や天候など）と内的要因（緊張やプレ

ッシャーなど)から研究した。それに加えて、朝日新聞スポーツ部が編集して出版した「あの夏(上) 甲子園の魔物と神様」と「あの夏(下) 君が輝いた甲子園」の二冊を読んだ。この二冊は主に高校野球の歴史の中で繰り広げられた記憶に残る試合や選手について取り上げた本である。(上)では主にチーム全体に焦点を当てており、(下)では個人に焦点を当てている。したがって「集団」と「個人」の二つの観点から見ることによって、「甲子園の魔物」や「野球の神様」の存在がより詳しく分かると考え、「甲子園の魔物」が出現する条件や「野球の神様」について検討する。

5. 結果

5-1 甲子園の魔物の存在

今回の研究で「甲子園の魔物」は存在すると考える。しかし「魔物」と言うが目に見える存在ではない。

面白いと感じる点・魅力	男性	女性
ハラハラする試合展開・逆転劇	38%	39%
負けたら終わりのトーナメント	33%	28%
都道府県対抗戦である	32%	29%
正々堂々・スポーツマンシップ	25%	26%
青春を感じるから	22%	34%
チームプレー	14%	15%
全校が一体となった応援団	12%	15%
試合ごとに選手が成長	11%	11%
特にない・分からない	19%	20%
その他	3%	3%

表1：甲子園の面白さ・魅力

表1は「何でも調査団」というサイトが実施した「甲子園の面白さや魅力」を男女別に聞いたアンケートの回答をもとに著者作成したものである(文献1)。「正々堂々」や「チームプレー」などという回答もあるが、男女ともに一番多かった意見として「ハラハラする試合展開/逆転劇」が挙げられてい

る(文献1)。全体の約4割を占めていることが分かる(文献1)。しかし高校野球に興味のない人や詳しくない人は「東京や大阪などが強いのでは？」という意見や「学校数が少ない都道府県は弱い」という意見がでてくるだろう。あながちその意見は間違っていないだろう。しかし単に強いところが甲子園での試合に勝利するということではない。高校野球に詳しい人や高校野球が好きな人は分かっていることである。最近で言うと2018年の第100回大会である。この大会は100回記念大会であったため出場校がいつもより多かった。この大会で注目を浴びた高校がある。それは金足農業高校である。名前だけ聞くと「どこの代表校？」という意見や「知らない高校だ」という意見などが多かった。ちなみに金足農業高校は秋田県の高校である。注目を浴びた理由は2つある。一つ目はエース投手である吉田輝星(現日本ハム)である。彼は県大会から一人で投げ抜き、見事に金足農業高校を県代表に導いた。特徴は150キロ台の直球と多彩な変化球である。2つ目はベンチ入りメンバー全員が秋田県出身ということである。近年の高校野球に出場する高校は私立校が多く、他県から来ている生徒を擁している出場校も多い。その中で金足農業は地元出身の生徒で構成されている。したがって秋田県の多くの方は応援甲斐があり、応援のボルテージも上昇していった。金足農業は前評判では「決勝までは行かないだろう」と思われていた。理由としては最近の高校野球の諸問題が関わってくる。それは天候と過密日程である。

改善すべき点	
過密日程	176
故障や熱中症への対策	132
特待生の規制の強化	112
女子高校野球の育成	60
プロによる指導の制限緩和	45
トーナメント制の見直し	21
その他	52

表2：高校野球大会で改善すべき点

表2は朝日新聞デジタルが実施した「大会などの運営面で最も改善すべき点は？」を聞いたアンケートをもとに著者作成したものである(文献2)。約600人の人に聞いたもので、過密日程と答えた人は176人、故障や熱中症への対策と答えた人は132人である(文献2)。この2つの回答で約半分を占めており、過密日程と天候の問題が多くの方が心配していることが分かる(文献2)。過密日程に関しては具体的な案はまだ検討中であるが、天候に対しての問題は具体策として水分補給の時間を増やすことや巨大扇風機を設置することが最近

の大会から実施された。しかしまだ完全な対策には至っていないのもっと議論する余地がある。

この大きな二つの問題が「甲子園の魔物」が存在する要因になっている。第55回記念大会（1973年）の2回戦で「怪物」と呼ばれていた江川卓も甲子園の魔物に襲われたと言える。栃木大会では豪速球を武器にヒット二本しか打たれておらず、実力は本物だった。しかし二回戦にその怪物を襲ったのが雨であった。雨の中での投球が得意な選手は少数であり、江川も得意ではなかった。延長12回、ここまで11本のヒットを浴びながらも無失点に抑えてきていたが、1アウト満塁のピンチを迎えた。雨で球が滑り出していた。その後サヨナラヒットを打たれ0-1で負けた。それに加えて1回戦でも延長15回を投げているので疲労が蓄積していた。「もし雨が降らなければ...」、「もし1回戦普通に勝てていれば...」と思う選手もいた。このように天候によって試合の勝敗が大きく変わってしまうパターンは多い。第73回大会(1991年)の3回戦の松商学園-四日市工業も劇的な試合である。3-3で迎えた延長16回裏に甲子園の魔物は現れた。それまで3失点で投げ続けていた四日市工業の井出元は1アウト満塁のピンチを迎えた。この日は気温が35度を超える猛暑日で、ぐんぐん気温が上昇していった。したがって両校の投手は相当な疲労がたまっていた。そして井出元は1アウト満塁のピンチでコントロールが定まらず痛恨の押し出しレッドボールを与えてしまったのである。精神力・技術ともにトップレベルと評価されていた井出元であったが、夏の猛暑という大きな魔物の前に力尽きてしまった。夏の気候に耐えるためにスタミナをつけてくる選手は多くいるが、それでも力尽きてしまう選手は多い。そのような気候による負担を軽減するための政策を導入していく必要がある。近年の夏は気温上昇し続けている。そのような環境にもかかわらず大会では政策があまり実行されていない。もっと議論されるべき課題である。天候などといった外的要因によって、選手の健康や生命を危険にさらすことや両チームともにベストなパフォーマンスを発揮できないことは避けなければいけないと著者は考える。したがって外的要因によって出現する「甲子園の魔物」はあまり良くないものである。

一方で第98回大会(2016年)の東邦(愛知県)-八戸学院光星(青森県)の試合では異様な光景が広がっていた。2-9と東邦が7点を追う展開で迎えた7回裏、甲子園の少しは徐々に変わっていった。その理由は東邦のプレーにあった。東邦の選手たちは7点差で負けている中、笑顔で楽しそうに守備位置やバッテリーボックスに向かっていき、素晴らしいプレーをしている選手の姿に甲子園の多くの観客たちが、一斉に東邦の応援歌に合わせて手拍子をして応援するという異様な光景がそこにはあった。そして東邦は7点差を逆転し、試合に勝

利したのであった。

表3は、文献3の作成者が「甲子園の魔物」が出現した試合の定義を3つ設定し、その定義に該当する試合を抽出して作成したリストに、著者が編集を加えたものである(文献3)。

開催年	勝者	都道府県	スコア	敗者	都道府県
2007年	佐賀北	佐賀県	5-4	広陵	広島県
2009年	智弁和歌山	和歌山県	8-5	札幌第一	北海道
2009年	花巻東	岩手県	7-6	明豊	大分県
2010年	仙台育英	宮城県	6-5	開星	島根県
2011年	八幡商業	滋賀県	5-3	帝京	東京都
2011年	智弁学園	奈良県	9-4	横浜	神奈川県
2012年	龍谷大平安	京都府	9-8	旭川工業	北海道
2013年	前橋育英	群馬県	3-2	常総学院	茨城県
2014年	三重	三重県	5-4	広陵	広島県
2014年	山形中央	山形県	9-8	小松	愛媛県
2016年	東邦	愛知県	10-9	八戸学院光星	青森県

表3：「甲子園の魔物」が出現したと言われる主な試合
このデータによると、1~2年に一試合は「甲子園の魔物が出現した。」という試合が繰り返されている。したがって「甲子園の魔物」は存在すると言える。(文献3)

5-2 野球の神様の存在

「甲子園の魔物」と対照的に言われるのが「野球の神様」である。代表的な試合として第76回大会(1994年)の決勝戦の佐賀商業(佐賀)-樟南(鹿児島)が挙げられる。表4は試合のスコアである(文献4)。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
佐賀商業(佐賀)	0	0	0	0	0	3	0	1	4	8
樟南(鹿児島)	0	3	0	0	0	1	0	0	0	4

表4：佐賀商業-樟南のスコア

この当時の鹿児島勢は前年までの10年間で、夏に5度もベスト8に進出している強豪県であった。前評判では優勝が確実視されていた。一方で佐賀は弱小県。一県一校の出場が定着する第60回大会より前は甲子園出場さえ難しかった。しかし、この大会で深紅の優勝旗を手にしたのは佐賀商業だった。この試合は両県の野球史を大きく分岐させた。この当時の樟南の選手は今でも「10回試合したら9回勝てる相手」と言い、佐賀商業の選手は「もう一回したら負ける」と言う。このよ

うな神がかり的な試合が起きるので「野球の神様」という言葉が使われるようになった。

6. 考察

今回の研究では「甲子園の魔物」はどのような要因で出現するのかを外的要因と内的要因の二つの観点で考察した。外的要因から見てみると、気候の問題は改善する余地があるが、球数制限の問題に関しては、昨年(2019年)の11月に正式に導入することが決定し、今年の春の選抜高校野球選手権大会から「一人の投手が一週間で投げられるのは500球まで」というルールが導入された。そのほかに3連戦の回避や申告敬遠(投球せずに敬遠)のルールなども設定された。球数制限は一人ひとりの疲労面は考慮されるが、投手の少ない公立校などは苦しむことが予想される。最近では複数の投手を用意して代表になる高校が多くなってきている。つまり分業制の時代になりつつあるのだ。今回の春の大会から導入されるので、どのような影響を及ぼすのかが気になるところである。

その一方で内的要因を見てみると、プレッシャーや緊張などは人間誰しも感じるものであり、それに負けてしまうのは仕方がないことである。また試合の最初の方にはそういうものを感じていなくても、試合終盤になっていくと応援のボルテージが高まっていくので感じるようになってくると考える。常に冷静沈着にすることは難しい。甲子園で行われる試合は逆転劇や接戦が多い。それには内的影響が関わっていると言える。また応援歌による影響もあると考える。智弁和歌山の「ジョックロック」は甲子園で演奏されると逆転することや試合が動くことが多いので「魔曲」と呼ばれている。応援歌というものは試合の流れを変えることが多いと著者は考える。そのほかには報徳学園の「アゲアゲホイホイ」や習志野の「レッツゴー習志野」などが試合の流れを変えるような応援歌であると言われている。

今回の研究では試合結果や朝日新聞のアンケート、本などから「甲子園の魔物」の存在の有無について調べてきた。「何でも調査団」というサイトが実施した「甲子園の魅力や面白さ」を聞いたアンケートでは「ハラハラする試合展開/逆転劇」と答えた人が多く、「甲子園の魔物」の存在を肯定している人が多いのではと考察した(文献1)。また朝日新聞の実施したアンケートでは甲子園の問題点を調査しており、「過密日程」や「熱中症の対策」の二つの答えで半数を占めた。この二点は今回の研究での外的要因のことであり、「甲子園の魔物」の存在に関係がある。著者は外的要因によって「甲子園の魔物」が出現したという状況は避けるべきであると考えており、具体策を出す必要があり、議論する余地がある。年々気温は上昇しており、熱中症で病院に運ばれる人も増加傾向にある。観客が対策をするのはもちろんのことであり、試合

をしている選手・監督やコーチ・マネージャー・応援団などといった試合に関わる人たちは特に注意する必要があるので大会本部からのケアなどがもっと行われるべきだと考える。したがって対策を打ち出すことによって外的要因による「甲子園の魔物」は出現しなくなると考える。今対策として採られているのは給水タイムの回数の増加・巨大扇風機の設置などである。さらに暑さ対策を出すとするならば、ベンチにエアコンを置いてクーラーをつけることや大会本部から1チームに氷を配布することを行うべきではないかと著者は考えた。

「甲子園の魔物」が出現したと呼ばれる試合はほとんどが3点差で決着がついている。同点のまま延長戦に突入してどちらかのチームが得点して勝利するパターンと9回の攻防で決着するパターンが多い。「甲子園の魔物」で検索して出てきた試合はそのようなパターンに当てはまっていることがほとんどである。大差で決着した試合には「甲子園の魔物」または「野球の神様」は出てこないことが推測される。

今回の研究では「野球の神様」についても考察した。佐賀商業(佐賀)ー樟南(鹿児島)の試合を例に挙げて研究した。この試合は前評判で樟南優位だったが、実際試合に勝ったのは佐賀商業だった。「野球の神様」は佐賀商業が試合を経験するにつれて成長し、緊張を感じなくいつもどおりのプレーをしていたので、「優勝」という栄冠を佐賀商業に授けたのではないかと著者は考える。

「甲子園の魔物」や「野球の神様」に共通するのは実際には見えないものであり、さまざまな条件によって成り立つということである。「甲子園の魔物」は天候などによる外的要因とプレッシャーなどによる内的要因のどちらかによって成り立つものであると考える。一方で「野球の神様」は外的要因や内的要因などはあまり関係なく、チーム状況などを見て出現するようなものではないかと著者は考えている。どちらにしる試合の展開が変わるので見ているほうは面白く感じるだろう。さらに試合展開が変わるだけでなく、番狂わせが起こる可能性を秘めているので恐ろしく感じる。

甲子園ではさまざまなことが起きる。松井秀喜に対する5打席敬遠、斉藤佑樹と田中将大の壮絶な投げ合いなどである。このようなことは甲子園だけで起こるのであって、他の球場では到底起こり得ないことであると考えられる。その理由としては①地方大会より迫力のある応援②甲子園ならではの緊張やプレッシャー③夏特有の暑さの3点が挙げられる。しかし甲子園の大舞台に立てるのはほんの一握りであるので貴重な経験となり、感慨深いことである。敗北したチームが甲子園の土を持って変えるのはそのためである。その一方で帰らないチーム・選手も存在する。その理由は来年もこの地に戻ってこようという強い意志を持っているからである。しかし地方大会を勝ち抜くことはとても難しいことなので、連覇

することはかなり厳しい偉業であることが分かる。したがって力のある高校でも「甲子園の魔物」の存在によって試合の勝敗が左右されることがあるので、甲子園での試合はとても難しいものであると考察される。

参考文献

(1)https://chosa.nifty.com/hobby/chosa_report_A20102817/5/

(2)<https://www.asahi.com/articles/ASL3H4H1HL3HUTQP00Y.html>

(3)<http://www.baseball-lab.jp/column/entry/331/>

(4)あの夏(上)甲子園の魔物と神様(編)朝日新聞スポーツ部
朝日新聞出版 2018 年

(5)あの夏(下)君が輝いた甲子園(編)朝日新聞スポーツ部
朝日新聞出版 2018 年